

4. 上原重男(京都大・霊長研)「哺乳類相の変遷」
5. 保坂和彦(京都大・霊長研)「マハレのチンパンジーにおける狩猟・肉食行動の研究：長期調査と短期調査の相互補完について」
6. 福田史夫(共立薬科大)「マハレB群の行動域」

討論

座長：早木仁成(神戸学院大)

7. 坂巻哲也(京都大)「1999年度調査計画：チンパンジーの対面的相互行為分析の視点」
8. 座馬耕一郎(京都大)「1999年度調査計画：チンパンジーと外部寄生虫の関係」
9. 松本晶子(京都大・理)「機会的な交尾にみられる雌の選択：繁殖行動の分析における長期継続データの重要性」
10. 中村美知夫(京都大)「Dunbarの言語進化仮説の検討：チンパンジーの毛づくろいのクリーク・サイズとヒトの会話のクリーク・サイズの比較から」
11. 葉風万舞句(京都大・霊長研)「チンパンジーの葉呑み込み行動：マハレとブドンゴの比較」

討論

コメント：竹中 修(京都大・霊長研)

世話人：上原重男・葉風万舞句・松本晶子・保坂和彦

予備調査をへたあと、マハレのチンパンジーの長期研究は1965年に西田利貞によって開始された。4つの演題はそのような長期継続データにもとづく発表であった。チンパンジーの社会構造や社会行動を調査するなかで、生息地の生態学的な基盤を明らかにする意義が再認識されている。植物相や動物相の遷移および現存量(バイオマス)を把握し、チンパンジーの利用と重ね合わせようとした成果が3件発表された。マハレ生態系の解明とともに、ほかの調査域との比較研究がますます重要になってくる。そのような研究のひろがり念頭においた発表が2題あった。またマハレで研究を始める予定、あるいは開始したばかりの若手研究者からの研究展望の紹介が2題あった。

2000年に調査開始35周年をむかえるマハレでの研究は、マハレ生態系のなかでチンパンジーがしめる役割の位置づけと、長期調査がつづけられているほかのチンパンジー調査地との比較とい

う2つの局面で、今後の発展が期待されよう。

(文責：上原重男)

第2回サガ・シンポジウム

「大型類人猿の研究・飼育・自然保護」

日時：1999年11月16日(火)～17日(水)

場所：犬山国際観光センター「フロイデ」

参加者：約300名

昨年に引き続き11月16日(火)の午後1時から17日(水)午後6時半まで、犬山国際観光センターでおこなった。サガ(SAGA)は、「アフリカ・アジアに生きる大型類人猿を支援する集い」の英文略称である。京都大学霊長類研究所の教官が中心となって推進しているNPO活動である。

第一部は、「日本のチンパンジーの将来像」と題し、日本が保有する約400個体のチンパンジーの将来をさまざまな角度から考えた。企画者：松沢哲郎・松林清明(京都大学霊長類研究所)、吉川泰弘(東京大学・農学生命科学)、平井百樹(東京大学・新領域創成科学)、吉倉 廣(国立国際医療センター)、鈴木 宏(宮川庚子記念研究財団)、早坂郁夫(三和熊本霊長類センター)、吉原耕一郎(東京多摩動物公園)。

講演は、平井百樹：遺伝子研究とチンパンジー、鶴殿俊史：三和チンパンジーの繁殖実績と現状、小寺重孝：日本モンキーセンターの40年、ジョゼフ・アーウィン：アメリカの大型類人猿：現状と将来展望(英語講演)。

第二部は、五つの交流分科会をおこなった。A：動物園・博物館関係者の集い(担当：吉原耕一郎・伊谷原一)、B：野生保全に関わる集い(担当：山越 言)、C：ゴリラのブリーディングローンを考える(担当：山極寿一、吉原正人、黒鳥英俊)、D：エンリッチメントの若手研究者の集い：インターネットを使った動物園間の情報交換システムの構築に向けて(世話人：森村成樹・落合知美・前田典彦)、E：ビジネス・ミーティング(チンパンジー委員会)である。

第三部は、「類人猿飼育における環境エンリッチメントへのアプローチ」と題し、環境エンリッチメントのさまざまなくふうについて情報交

換した。東京多摩、札幌円山、横浜ズーラシア、林原博物館など、最近の新しい試みや将来構想についての話題である。企画者：吉原耕一郎（東京多摩動物公園）、伊谷原一（林原博物館）。

講演は、川端裕人：アメリカにおける環境エンリッチメントの展開状況、日橋一昭：飼育係の環境エンリッチメントに対する意識調査、島原直樹：多摩の新チンパンジー舎にかけた夢、佐藤正吉：多摩動物園の事例の設計する側からの一言、渡辺則行：札幌円山新類人猿舎への要望、堀田里佳：札幌円山の構想を図面に－設計者の苦勞－、勝村実：横浜ズーラシアの動物舎設計、伊谷原一：展示のエバリュエーションについて。

第四部は、「野生保全への多様なアプローチ」と題し、野生生物保護の現状とさまざまな試みを紹介し方法論について考えた。企画者：上原重男（京都大学霊長類研究所）、山極寿一（京都大学・理）、山越 言（京都大学・AA地域研究科）、中村美知夫（日本モンキーセンター）。

講演は、小林聡史：誰のための自然保護か？－アフリカにおける保護区－、ジェームズ・ワキバラ：類人猿保護の一翼を担う地域住民：タンザニアの国立公園管理における取り組み方の変化（英語講演）、加納隆至：タンザニアにおける分布限界域のチンパンジーの現状と保護、橋本千絵：熱帯雨林の利用と保護との両立にむけて－ウガンダ・カリンズ森林の事例－、山極寿一：カフジ山で起きたゴリラの虐殺、山越 言：野生生物保全活動と地域住民のくらしーギニア共和国ニバ・ボソウ地域の事例から－、鈴木 晃：オランウータン孤児の密輸入とインドネシア・カリマンタンの森林保護。以後のプログラムは、COE国際シンポジウム「類人猿の進化と人類の成立」（竹中 修大会委員長）と共同で実施した。

第五部は、ポスター・セッション。サガのための日本語発表は以下のとおり。

吉原耕一郎・島原直樹・佐藤正吉：東京都多摩動物公園のチンパンジーと新舎の構想、渡辺則行・堀田里佳：札幌円山動物園のチンパンジーと新類人猿舎の構想、堀 浩・勝村 実：横浜ズーラシアの動物舎設計、伊谷原一・森村成樹・不破紅樹：林原類人猿研究センターとチンパンジーたち、門田智恵美：わんぱくこうちアニマルランドにおけるチンパンジーの環境エンリッチメン

ト、堤 秀世：伊豆シャボテン公園における環境エンリッチメントの試み、宮沢 厚：那須ワールドモンキーパークとチンパンジーたち、熊崎清則・前田典彦：京都大学霊長類研究所のチンパンジー飼育施設と環境エンリッチメントの試み、道家千聡・松沢哲郎：飼育チンパンジーの食物の好み－100品目の嗜好テスト－、上野吉一・落合知美：カニクイザル・オス個体の再ペアリングの試み：プレイケージの利用、森村成樹・落合知美・前田典彦：インターネットを使った情報開示の実例。

第六部は、記念講演。紹介：長谷川寿一（東京大学総合文化研究科）「オランウータンとわたし」を訳して。講演者：ビルーテ・ガルディカス、演題：野生オランウータンとともに－失われゆくエデンの園から。

期間を通して、約300人の参加者があり、盛況だった。なお、昨年（2008年）の第1回サガ・シンポジウムの成果が、「霊長類研究」第15巻2号に特集号として公表された。参照されたい。

（文責：松沢哲郎）

COE国際シンポジウム

「類人猿の進化と人類の成立」

COE International Symposium “Evolution of the Apes and the Origin of the Human Beings”

日 時：1999年11月18日（木）～20日（土）

場 所：犬山国際観光センター「フロイデ」

参加者：130名

文部省科学研究費、COE形成基礎研究費「類人猿の進化と人類の成立」の援助による国際シンポジウムを、平成11年11月18日より20日までの3日間犬山市の国際観光センター「フロイデ」にて開催した。霊長類研究所の竹中 修を組織委員会委員長、同じく松沢哲郎および京都大学理学研究科の山極寿一をプログラム担当とした。霊長類研究所の林 基治、大澤秀行、濱田 稔、三上章允が会場、実際の運営、渉外を担当した。招待講演は国外から22名、国内からの4名に加え、一般参加は国外からの7名、国内からの97名、合計130名におよんだ。国外からの参加者は10カ国を数えた。本邦に留学中の学生の参加等を加えると、外国か

らの参加は40名、15カ国を越えた。一方それらの若い研究者には、ポスター発表の場を提供し、加えて午後の一時間半程度をポスターの内容を口頭で発表する場を提供したのもシンポジウムを活発なものとした。

「人間とは何か」という命題は、科学技術の急速に進展する現代社会の中でひととき重要性を増してきている。近年の霊長類学は、霊長類の一員としてのヒトを他の霊長類との相違点および類似点から明らかにしてきたが、人類進化の過程が解明されたとは言いがたい。類人猿に関する研究はその行動や、生態、社会、認知機能に関して多くの研究がなされて来ており近年は遺伝子のレベルでの研究、近い将来には非侵襲的な測定手段による脳の研究も盛んになるであろう。

具体的には生態、行動、進化人類学(古人類学、分子)各8題ずつ計24題の発表とした。類人猿のフィールドでの生態や社会行動の観察研究では、テナガザルのペア外婚も含む社会構造に関する新しい知見、野生オランウータンの道具使用等の発表があった。認知機能に関する研究では道具使用とシンボル使用について、ヒトと大型類人猿だけが可能であり、小型類人猿やマカクでは困難であることの実証と理論的説明として階層処理モデルの提出があった。ボノボの研究では近年注目されている「心の理論」と呼ばれる他者の心の理解についてもボノボでは他者の心の理解が可能であることを示唆する実験の紹介があった。

分子レベルでの研究では、類人猿の地域差、類人猿進化の過程でのゲノムの大きな変化、血液型糖鎖類人猿での進化と新しい系統樹の作成方法の発表が行われた。

本シンポジウムではテナガザルを含む類人猿に関して、広範な研究分野における最新の成果の発表があった。また本COE形成基礎研究費と同様に、ドイツのマックスプランク進化人類学研究所においては、大型類人猿4種の飼育と、行動学から分子生物学にわたる広範囲の研究が企画され、アメリカニューヨークの研究グループは動物園の協力によりエイジング研究、死亡個体の脳の研究等、類人猿を対象とした大型プロジェクトが立ちあがりつつあり、それらの研究組織との意見交換も成果の一つであった。

招聘者とは昼食の時間帯をビジネスミーティ

ングと名付け、特に類人猿保護について今後の取り組み方について討議した。遺伝学的にも、行動でもこれほどヒトとは近い関係を持つ彼らの生息地の保全、またヒトに近いが故に実験動物として侵襲的な研究への使用を禁止する計画等、霊長類研究者として今後広くコンセンサスを得て行かなければならない問題について活発な議論が出来たことは有意義であった。

(文責：竹中 修)

ボノボの保護に関するワークショップ Bonobo Population and Habitat Viability Assessment Workshop

日 時：1999年11月21日(日)～22日(月)
場 所：犬山国際観光センター「フロイデ」
参加者：約20名

1999年11月21日、22日の両日、犬山市の国際観光センター「フロイデ」において、IUCN(国際保護連合)のCBSG(Conservation Breeding Specialist Group)ボノボの保護に関するワークショップ(Bonobo Population and Habitat Viability Assessment Workshop)が開催された。ボノボの研究者やボノボの保護関係者ら約20人が集まり、ボノボの生息地における現状とこれからの保護活動をどうするかという点を議論した。Vortexという人口動態シミュレーションにかけるために、今までの研究で得られたボノボの人口動態のデータを討議するワークグループと、ボノボの現在の生息状況と生存に対する脅威を検討するワークグループに分かれて話し合われた。最後に、全員でボノボの保護のための行動計画について話しあった。参加者は以下の通り。

Sally J. Coxe, Bonobo Conservation Initiative
Jef Dupain, Royal Zoological Society of
Antwerp

Linda Van Elsacker, Royal Zoological Society
of Antwerp

Joseph Erwin, Great Ape Aging Project
Barbara Fruth, Max-Planck-Institut Seewiesen
Shiho Fujita, Primate Research Institute,
Kyoto University